

radical chic

東アジアへの帝国主義支配に楔を画する政治 の輪郭を形成する沖縄—韓国との反戦・反基 地・自己決定の闘いに連帯し、今こそ安倍政 権打倒の今夏階級形成戦に立ち上がろう！

全力で辺野古埋め立て阻止、安倍打倒、 沖縄知事選勝利に向けて立ち上がろう！

七月二十七日、ついに、あるいは
やつとというべきか、翁長沖縄県知
事が辺野古埋め立て承認の撤回を表
明した。我々はいま、沖縄とヤマト、
そして東アジアの今後を巡る真に重
大な局面に立っている。

異常気象と政治の異常

地球温暖化に伴う気候変動＝異常
気象が続いている。そして、その異
常気象が政治の劣化を浮き彫りにし
ている。

西日本豪雨の最中、気象庁による
特別警報が発表されていたにもかか
わらず、安倍をはじめとする自民政
党の多くの閣僚、議員は「赤坂自民
亭」と称する会場で楽しく飲み食い
し、その様子をSNSに掲載した。
堤防の決壊等により二百人以上が死

亡し、その後の連日三十五度を超え
る猛暑で熱中症による死者が続出す
る中、党利のための参院定数増とカ
ジノ法が強行採決された。両法案と
も世論調査では不支持が圧倒的に多
く、また、森友・加計疑惑でも安倍
の説明に世論の過半数が納得してい
ないと明らかになっている。にもか
かわらず安倍の支持率は四割を超え
ており、自民党総裁選での三選も確
実視されている。ハト派とされる「宏
池会」会長の岸田は、自派所属議員

が安倍政権から干されることを恐
れ、総裁選不出馬とともに「安倍三
選支持」を明確にした。「保守本流」
なるものが今まで以上に「極右」に
すり寄っている。「LGBTは生産
性がないから支援する必要はない」
と雑誌に掲載する議員など、自民党

政治家によるヘイト発言も枚挙にい
とまがない。「生産性」発言をした
杉田水脈なる議員は安倍が強く推し
た結果、当選確実な比例中国プロッ
ク単独一位になったと言われている
が、彼女は「コミンテルンが息を吹
き返しつつある」「その温床が日本
で、夫婦別姓、LGBTなどを広め
などの妄言を繰り返してきた。子供
を産まない選択を「勝手なことを考
えている」と発言し物議をかもした
二階などの自民党幹部も杉田の発言
を擁護しているが、彼女ら、彼らの
発想は「ネットウヨ」、「在特会」とな
らば変わらない。

古代から「治山治水」が政治の要
諦と言われてきた。しかし、度重な
る水害にも関わらず優先すべき堤防
の強化を後回しにし、相も変わらず
巨大利権が絡むダム建設を促進して
被害を広げ、今になっても原発を基
幹電源と位置付け、米国トランプに

へりくだり臣従する安倍自民党政
がこのまま継続するなら、「異常気
象」ならぬ「政治の異常」だろう。

この「政治の異常」は世界的なも
のであり、資本主義の末期的症状の
表出としてある。トランプは「自由
と民主主義」という米国の理念を捨
て去ろうとしている。EUも「ヨー
ロッパ統合」という理念と目的が解
体しかかっている。今、資本主義を
最も忠実に体現しているのが中国
とロシアというのは歴史の皮肉だ。
我々左派は、資本主義解体後を準備
しなければならない。

トランプの「取引」と安倍「外交」
六月十二日の米朝首脳会談開催
を「歴史的偉業」と自画自賛した
トランプだが、朝鮮半島の非核化の
実現など、その成否は今後の交渉に
かかっており、まだ結果を判断する
ことはできない。だが、「偉業」と

トランプの「取引」と安倍「外交」
六月十二日の米朝首脳会談開催
を「歴史的偉業」と自画自賛した
トランプだが、朝鮮半島の非核化の
実現など、その成否は今後の交渉に
かかっており、まだ結果を判断する
ことはできない。だが、「偉業」と

は言えなくとも、少なくとも「歴史的」ではあった会談開催は、トランプの決断というより、韓国ムン・ジェイン政権の、ろうそく革命を成し遂げた民衆を背景とした外交努力が実を結んだ結果であることは明らかだ。トランプは米朝会談後、貿易問題で中国やEUにけんかを売り、さらにNATOの軍事費問題でも加盟国、とりわけドイツに「米軍引き揚げ」を脅し材料として増額を迫っている。一方でロシアのプーチン大統領との会談では、米国情報機関の報告を無視してプーチンを持ち上げ、大統領選でのロシア介入に関する発言をお膝元の保守派にまで批判されると、翌日には発言を修正するというお粗末な事態を招いている。

一方の安倍は、「環太平洋パートナーシップ協定」(TPP)の一部を凍結したうえで今年三月に米国抜きで十一カ国で署名した(CPTPP)。さらに七月にはEUとの間で「EU日本経済連携協定」(EPA)に署名した。このことは安倍がトランプのご機嫌取りと米国追従を継続しつつ、経済面ではトランプが壊そ

うとしている従来のグローバル資本主義の枠組みを必死で守ろうとあがいていることの表れである。また安倍は、先島への自衛隊配備などによる米軍の東アジア戦略の肩代わりにきわめて熱心だが、これも米国への忠誠を誓うと同時に、相対的に自立した帝国主義国家としての地位獲得という安倍の夢想にも沿ったものだ。

埋め立て承認撤回と政治決戦

六月二十三日、沖縄慰霊の日の式典に臆面もなく出席した安倍は、辺野古移設を明言し、当然にも県民・遺族から激しいヤジを浴びた。翁長知事は「辺野古への基地建設は沖縄の負担軽減にもアジアの緊張緩和の流れにも逆行するもので全く容認できない」と発言した。そうした中、安倍とそのおつきの面々は、地元

ア侵略戦争は正当な戦いであり、沖縄戦の結果は「残念」なものであっても、その「平和」「鎮魂」に対する思いは反戦の詩を読む中学生からそっぽを向く程度のものなのだ。七月十九日には辺野古崎南側のK4護岸の開工部が閉鎖された。二十五日には本部港で土砂が運搬船に積み込まれるのが確認された。土砂投入への準備が整おうとしている。

いよその正念場を迎える。八月十一日には県民大会、八月六日から十日と十六日から十八日のゲート前連続集中行動が行われる。首都圏においても十一日の「沖縄県民大会」に呼応する首都圏大行動をはじめとする諸行動が準備されている。十一月十八日には沖縄県知事選がある。辺野古はたとえ埋め立てが始まっても、大浦湾側のマヨネーズ状の地層の地盤改良のため設計変更が必要となる。設計変更の許可権限を持つのは知事だけだ。敵権力はそのため、知事選に向け合法、非合法を問わずあらゆる手段を用い、全力を上げてくるだろう。八月から十一月の知事選まで、まさに政治決戦となる。そしてそのことが沖縄だけでなく、今後のヤマトの権力構造の継続か変革かの試金石となるだろう。

本紙前号(二十一号)での指摘どおり、トランプの外交は「取引(ディール)」なのだ。同盟国であるか、仮想敵国であるかは、トランプ

の判断にはあまり影響しない。「取引」であるからには米国が儲かるか、儲からないかが判断基準となる。米朝会談は在韓米軍のコスト削減に必要であり、米軍の代わりとして日韓に一機二千億円でと言われるイー・ジス・アシアなど米国製の武器を大量に売り込むことで、アメリカの軍需産業の利益を図ることができから「良いこと」なのだ。これはNATO加盟国の軍事費増額による米

の負担軽減とも軌を一にしている。もちろんトランプの判断は極めて短期的な利害に基づいており、中長期的には米国覇権の終焉を促進するものと言える。

今こそ辺野古新基地建設反対を軸とした左派の総結集を勝ち取り、全力で辺野古埋め立て阻止、安倍打倒、沖縄知事選勝利に向けた諸行動に立ち上がる！ (志村 圭)

する沖縄の映像批評家・仲里効さんの論評がある。 今回のシンポジウムのゲストは菅孝行さんと仲里効さん。菅さんは、「護憲」というと九条護憲に特化して考える人が多いが、要するに「象徴天皇制を守る」ということ。明仁が

6.23シンポジウム報告 「明治150年に問う—沖縄と天皇制」

六月二三日の午後、六・二三シンポジウム「明治百五十年に問う—沖縄と天皇制」が専修大学内にて開催された。主催は沖縄シンポジウム実

行委員会(沖縄文化講座呼びかけ)、情況出版の後援。学生五〇人を含む一三〇人が参加した。 沖縄シンポジウムは六年目にな

る。二〇一三年四月二十八日から昨年の五年目までは、一九五二年に講和条約と旧安保条約が発効した四月二十八日にあわせて、「東アジアから見た沖縄、そして日本を問う」というテーマでシンポジウムを開催してきた。今年は激変する東アジア情勢

と「明治一五〇年」キャンペーンを見据えて、「沖縄と天皇制」をテーマに掲げた。企画のベースには情況誌二〇一八年冬号に掲載された沖縄の詩人・批評家の川満信一さんと菅孝行さんの天皇明仁の「八・八メッセージ」を巡る往復書簡とそれに対

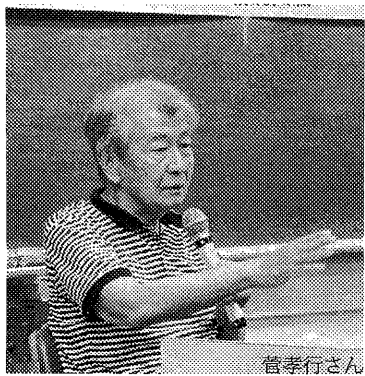
する沖縄の映像批評家・仲里効さんの論評がある。 今回のシンポジウムのゲストは菅孝行さんと仲里効さん。菅さんは、「護憲」というと九条護憲に特化して考える人が多いが、要するに「象徴天皇制を守る」ということ。明仁が



仲里効さん

そう考えるのは当然。この象徴天皇制を安倍が壊そうとしている。そういうジグザグはあるが、基本性格は変わらない。天皇制とは、飽くなき近代化を推進するために考案された、国家神道を権威の根拠とする日本近代の国民国家の統治形態である。その点において、維新期の憲法なき実効支配も欽定憲法下の国家も象徴天皇制国家も共軌である」と喝破し、「生活の場でも、労働の場でも、資本や権力との闘いの場でも、生き残る場の中に天皇が崇敬・畏怖の感情を喚起しなくなるような状況を作り出すには、天皇制イデオロギーの権威が資本制の支配にも国家権力の統治にも効果を発揮できなくさせることが必要だ。それには継続的な闘争の足腰が必要なので、街頭から立ち返ってきたときの〈陣地〉が不可欠となる」と提起した。仲里さんは「沖縄では、『明治一五〇年』で近代の起点を捉えるよりは、一八七九年の琉球処分から考える。ここに近代史の起点の違い、沖縄と日本の非対称

性がある」と沖縄の歴史認識の特徴を指摘、「南西諸島の島嶼防衛論が打ち出される時期と天皇の沖縄訪問が実は構造的に絡み合っている。初めての宮古・八重山訪問は二〇〇四年で、島嶼防衛論が自衛隊制服組の中で構想されていく時期と重なる。天皇在任中最後となる本年三月の沖縄・与那国訪問は島嶼防衛計画の実態化と〈象徴の務め〉の総仕上げと重なる。三月二十七日は、琉球処分が断行された日。与那国訪問の三月二十八日は、陸上自衛隊沿岸監視隊開設二周年の日。与那国駐屯地自衛官が制服姿で天皇歓迎の堵列(とれつ)に動員された」「明仁の『八・八メッセージ』で言われた『象徴の務め』は、島嶼防衛論が出てくると構造的に絡み合っている。与那国島に陸上の監視部隊が配備され、那覇の海軍も強化され、そして日本版海兵隊―陸自水陸起動団がキャンプ・ハンセンに配備される構想まで練られている。さらに言えば、辺野古の米軍基地も、将来的には確実に日米一体となった自衛隊基地として戦略的に位置づけられていくのではないかと南西諸島の軍事要塞化計画と象徴天皇制の再構築のプロセスの絡み合いを強調した。



植孝行さん

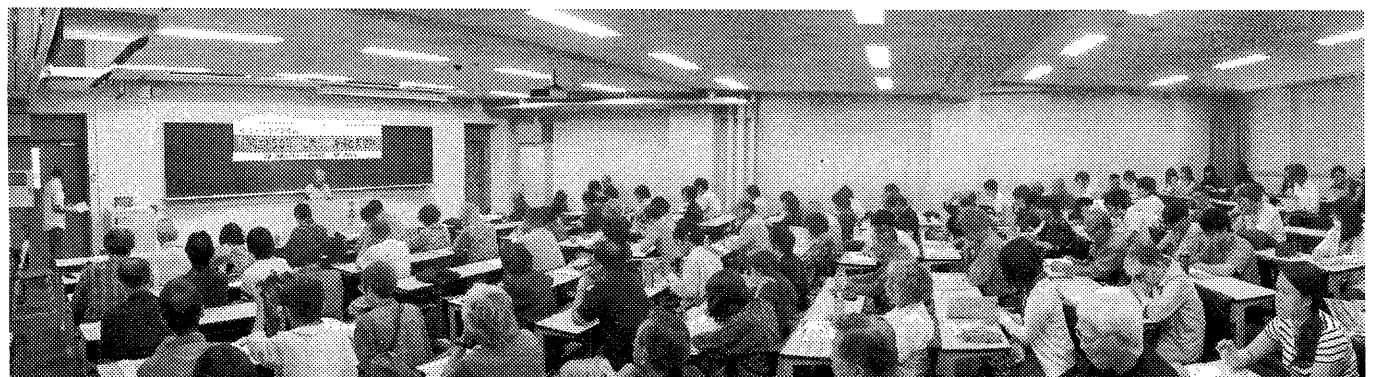
た。相互討論の時間が足りなかったのは残念だが、若い世代には聞き慣れない、難解なテーマにも関わらず、アンケートに書かれた感想を読むと、学生諸君には多大な知的刺激となったようだ。

特別報告として琉球民族遺骨返還研究会代表の松島泰勝さん(龍谷大学)から「継続する植民地主義―琉球人遺骨返還問題」の提起とアピールがあった。これは戦前一九二八年から二九年にかけての京都帝国大学金閨丈夫助教授による琉球人遺骨盗掘問題の告発だ。琉球併合後の植民地体制下、沖縄本島北部の今帰仁村にある百按司墓(ももじゃなばか)から琉球人遺骨が持ち出され、二十六体が京都帝国大学に、台北帝大に三十三体が寄贈された。松島さんらが京都大学総合博物館に質問を投げかけたが要求を一切拒否され、マスコミの取材も受け付けない京都大学の対応に怒りを募らせ、琉球人遺骨返還訴訟を決意するに至っている。

同様の遺骨返還問題はアイヌ民族にもある。これはまさに継続する植民地主義であり、沖縄にとつての「明治一五〇年」を象徴するものと言える。松島さんの呼びかけに会場から約一万四千円の訴訟カンパが寄せられた。

シンポジウムには今年も安次富浩へり基地反対協共同代表から「辺野古からのメッセージ」が寄せられた。安次富さんは「政治の劣化、労働運動の劣化」のヤマトの現状を厳しく指摘し、「象徴天皇制の呪縛からの解放が民主主義の発展につながる」と述べ、「本集会でヤマトがはぐくんできた差別支配を総括し、韓国民衆の民主主義を発展させたローソク革命から学ぶべきであろう。私たちうちなんちゅうも韓国の闘いを学び、連帯し、東アジアの平和を東アジアの人々と共に構築していきたい」と檄を飛ばした。

シンポジウムの最後に沖縄・一坪反戦地主会関東ブロックの外間三枝子共同代表からアピールがあった。外間さんは、学生に向かって「辺野古の土砂投入が八月十七日と言われている。そこに向けて首都圏で行動を準備している。沖縄のことを少しでも考えている人は行動してほしい。ぜひ心あるならばウチナンチュと闘って!」と呼び掛けた。



【連載】ネグリ―ハートを読む (16)

危機が生み出した主体形象 2

幾瀬仁弘

負債という見えない鎖

搾取から負債への変容は、資本主義的生産の変容に対応している。それは、レントによって支配された秩序への変容である。レントを手に入れる者は、富の生産の現場から離れたところにおり、そのため搾取の残酷な現実や生産的労働の暴力、そしてレントを生み出すさいにみずから引き起こす苦痛を知ることがない。ウォール・ストリートからは、彼らが得る価値は、膨大な数のマルチチユードからの搾取によって成り立っていることが見えない。こうしたことは、金融による人々の生のコントロールを通して不可視なものとして、消し去られてしまうのである。

今日では、失業者、非正規労働者などの不安定労働者ばかりでなく、安定した正規雇用に従事する者もみな貧困状態に追い込まれている。彼ら彼女らの貧困を特徴づけているのは、負債の鎖である。借金を負わされることは今日では一般化してきており、さながらかつての隷属関係が回帰しているかのようなのである。借金を負わされた

者は、自らが陥っている悲惨な借金地獄から這い上がる事ができず、打ちひしがれる毎日を過ごさざるを得ない。

メディアに繋ぎとめられた者

第二の形象は、「メディアに繋ぎとめられた者」である。今日では様々なメディアが存在し、私たちの周りには情報が過剰なまでに溢れており、私たちも種々のメディアに自由にアクセスできるようになっている。かつてならば、情報を一方的に照射されるのみで、こちらからアクセスすることができないとか、メディア機器の使用に際しても不平等が存在するとか、結果として大手のメディア会社から無批判的に伝えられることを鵜呑みにし、体制に操られてしまうなどということが問題になっていたが、今や異なった形でメディアをめぐる問題が現れている。「メディアに繋ぎとめられた者」は、情報、コミュニケーション、表現の過剰によって抑え込まれてしまっている者たちである。人々は何かにとりつかれたように、プ

ログをせつせと書き、ウェブを頻繁に閲覧し、様々なソーシャル・メディアに参加する。私たちは自ら進んでメディアに隷属し、その虜になり、鎖につながれる。

しかし、非物質的労働が主導権を握る時代にあつては、こうした現象は起こり得る。とりわけ先進諸国の多くの労働者にとつて、ソーシャル・メディアは仕事から解放してくれるものであるのと同じに、仕事に縛りつけるものでもある。スマートフォンやワイヤレス接続があれば、どこでも行ける。つまり、どこへ行くかがつねに仕事であるということなのだ。メディア化は労働と生活の区分をますます曖昧なものにする主要因なのである。

メディアに繋ぎとめられた者たちは、受動的ではない。たえず参加を呼びかけ、好きなものを選択させ、自分の意見を述べることを促すメディアに能動的に参加する。これに対しメディアの方も対応してくれる。その結果、メディアにつねに注意を払ってなければならなくなる。彼ら彼女らはメディアに注意を奪われた者たちなのだ。メディアを媒介しなければ人間関係を持ち、保つことができない者たち、メディアの隷属者た

ちである。

二〇一一年の世界各地の闘争は、コミュニケーションに関する真理を再発見させた。フェイスブック、ツイッター、インターネット、その他のコミュニケーション・ツールは確かに役立ったが、これらのメディアはどれも、身体的に一緒にいることや現場で交わされる身体的なコミュニケーションにとつて代わることはできない。こうしたコミュニケーションこそ、集合的な政治的知性と行動の基盤となる。

セキュリティに縛りつけられた者

第三の形象は、「セキュリティに縛りつけられた者」である。空のセキュリティゲートを通り抜け、身体も所持品もスキャンされる。特定の国々に入国するために、指紋を採られ、網膜をスキャンされる。失業者になり、勤労福祉制度に世話になることになれば、別種の綿密な調査にさらされ、その後、職を得るための努力、働く意志、就職活動の進展ぶりなどが記録される。病院、官庁、学校といった組織はどこも独自の調査体制やデータ保存システムを持っている。

さらに街を歩けば監視カメラに記録され、クレジットカードで買物

をすれば購買履歴が記録され、インターネットで検索すればその足跡を追跡される可能性があり、携帯電話の通話の傍受も簡単にされてしまう。セキュリティ技術は近年急速に進歩し、私たちの生活の隅々にまで浸透している。

四六時中監視され、そこから逃れることができない。まるで囚人のようだ。フーコーは、監獄は近代の社会モデルであると述べたが、まさに社会全体が監獄のようである。実際これは比喩ではなく、米国では犯罪率は比較的一定に保たれているにもかかわらず、収監者数は戦後最も少なかった一九七〇年代初頭に比べ五倍以上に増加している。過去数十年に渡り次々と監獄が増設されているにもかかわらず、監房は今も入りきれないほどの人で溢れかえっている。

私たちはセキュリティの対象であると同時にその主体でもある。監視されるのと同時に、怪しい者がいないかたえず用心するようになるといふ呼びかけに応じて、つねに「犯罪者」に目を光らせている。なぜか。恐れである。恐れを抱いているから、私たちはつねに監視の呼びかけに自然に応え、このような状況を受け入れてしまうのである。